会報

2014 年 9 月 20 日
第 65 号

日本体育・スポーツ経営学会
Japanese Society of Management for Physical Education and Sports
http://www.jsmpes.jp

第 65 号の内容

1 ごあいさつ
2 追悼　梅澤宣雄先生を偲ぶ
3 コラム　ーいま思うことー
4 本年度の研究集会
①第 48 回研究集会
②第 49 回研究集会
③第 50 回研究集会
5 第 37 回学会大会報告
6 第 38 回学会大会のご案内
7 各委員会報告
8 会議報告
9 事務局から

■ ごあいさつ

不透明な時代に直面して

会長　柳沢　和雄（筑波大学）

不意を突くように秋がやってきた、と思わせるような気候になりました。会員の皆様におかれましては、益々ご活躍のこととご推察申し上げます。また、今年の夏は全国各地で大雨等による痛ましい自然災害のニュースが流れ、心を痛められたことと思います。東日本大震災に続く今般の自然災害等の出来事や気候変動は、多くの人々に何とも言えない不安感を抱かせたことでしょう。

さて、言うまでもなく日本の体育・スポーツ界の状況は大きな転換期に入っています。スポーツ立国戦略の公表、スポーツ基本法の公布、スポーツ基本計画の策定と、僅か3年間で体育・スポーツの法制度に変化が起こり、日本体育・スポーツは新しいステージに立ちました。そしてその間に起こった東日本大震災と福島原発事故との関連では、特にスポーツ界から、いわゆる”スポーツの力”に大きな期待が寄せられ喧伝されてきました。さらに 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの招致開催は、体育・スポーツ界だけでなく日本の社会・経済に多大な影響を及ぼすことは間違いありません。

このように日本の体育・スポーツは大転換期に直面しているわけですが、大きな法制度改革、被災地

の復興とスポーツ、メガスポーツイベントなどが生み出す体育・スポーツの未来像は明確にされているとは思えません。被災地の生活の豊かさを保証するために、スポーツはどのように関わったら良いのでしょうか。また、震災の収束も目処がつかず、多様な政治経済問題を抱える中で、東京オリンピック・パラリンピックをどのように人々の生活に寄り添わせることができるのでしょうか。さらには 3,500 にも及ぶ総合型地域スポーツクラブの経営をめぐる将来的な見通し、スポーツ庁の設置と学校体育をめぐる問題、2020 年後の体育・スポーツ問題も極めて不透明と言えましょう。おそらく多くの会員は、このような現況に何とも言えない不安感を抱いていることでしょう。私自身も、十分な議論が行われたとは思えない中での多くの意思決定に、どうすることもできない不安と焦燥感を感じることが多々あります。

国際競技力向上とメダル獲得数やメガスポーツイベントの経済効果など、マスメディアが関心を寄せる体育・スポーツ問題への経営学的な研究関心を疎かにすることはできません。しかし一方で、このような時だからこそ、体育・スポーツ界全体を俯瞰しながら長期的展望に立った議論が取り交わされるべきではないでしょうか。スポーツ立国戦略で提案された“新しい公共”の基礎となる協働をどのように紡ぎ出すのか、スポーツ基本法に謳われた“スポーツ権”をどのように保証し“文化”としてのスポーツの成熟化を図るか等々、根本的な問を念頭に置きながら体育・スポーツ経営の課題に向かい合いたいものです。

本学会では、例年通り学会大会や研究集会を企画しその開催に努めているところですが、本年度から約3年間を目処に研究プロジェクトをスタートしました。この研究プロジェクトは特定の研究テーマに関心を持って頂いた会員同士が意見交換をして課題にアプローチしようとするものです。もちろん頻繁な会議はできませんが、IT 等を駆使して意見交換を行う予定です。また、科学研究費補助金への申請も試みたいものです。今回は「スポーツプロデュース研究」プロジェクトと「エクセレントクラブ研究」プロジェクトを設置しました。「スポーツプロデュース研究」ではみるスポーツを対象としますが、単にビジネス的な成功を志向するものではなく、スポーツ自体の質や価値をどのように高めるか、みる人の観戦能力・享受能力の捉え方や高め方について議論して欲しいと思っています。「エクセレントクラブ研究」では、20 年にもなろうとしている総合型地域スポーツクラブ育成政策をめぐって、ある意味で乱立する総合型クラブの成果指標の開発が期待されます。

先に述べたように、日本の体育・スポーツの未来像が不透明な時代にあって、このような会員が協働するプロジェクトは、大きな意味あるチャレンジだと思います。研究プロジェクトだけでなく、研究集会や学会大会を通して多様な会員が集い協働することで、新たな研究課題が発見されることはもとより、人々の生活に寄り添った体育・スポーツ経営学的視点や体育・スポーツの不透明さを払拭する議論が展開されることを期待しています。

■追悼　梅澤宣雄先生を偲ぶ

（梅澤宣雄先生は去る 2014 年 3 月 20 日に永眠されました。生前賜りました本学会への多大なご尽力に感謝すると共に、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。）

梅澤宣雄先生の足跡

木村　和彦（早稲田大学）

生前の梅澤先生と親交の深かった諸先輩方が数多くおられる中で、私が先生の「足跡」を書かせていただくのは、わずか2年間（1999-2000 年度）ではありましたが、同僚として職場を共にさせていただくことができたというご縁からと思っています。初めて教養体育から専門課程で教育研究に従事することになった私にとって、先生からご指導いただいた2年間はとても大切な時間となりました。あらためて生前のご高配に感謝申し上げますとともに、衷心よりご冥福をお祈りいたします。

梅澤宣雄先生の御略歴を簡単な年表にまとめさせていただきました。先生は、1935 年福島市のお生まれで、県内随一の名門校である福島高校をご卒業後、1958 年東京教育大学体育学部卒業、1960 年同大学大学院修士課程体育専攻科を修了なされています。その後、5 年間早稲田工業高校で教鞭をとられた後、1965 年 4 月、早稲田大学教育学部に前年に開設されたばかりの体育学専修の専任講師として着任されました。まだ 29 歳で新進気鋭の先生が、体育学専修のカリキュラムの改革と確立の中心として活躍されたことは、同僚の宮内孝知教授（体育学専修1期生）が、先生の退職に寄せた文章に書かれています。1990 年には、早稲田大学創立 100 周年記念事業として創設された人間科学部（スポーツ科学科）に所属を移されましたが、一貫して体育（スポーツ）経営学担当の教授として勤められました。実は、先生は定年（70 歳）を待たずに、65 歳で選択定年制を選ばれて退職されているのですが、当時早稲田大学に移ったばかりの私を驚かせ、不安にさせるのに十分過ぎる出来事でした。

最後に、僭越ではありますが梅澤先生のご業績について、私なりに3つにまとめさせていただいて、先生の足跡を辿る作業を締めくくりたいと思います（思い出を含めた私なりの考察ですのでご容赦ください）。一つは、1960 年代の研究を中心として、宇土正彦（本学会初代会長）体育経営学の古典ともいえる「体育管理学（1970）」に対して、他の宇土門下生とともに実証的なエビデンスを提供したという貢献です。例えば、梅澤、宇土、佐藤（良）、大塚、佐藤（勝）、八代、安達、高島「運動生活に関する体育管理学的研究（第5報）」（1965）体育学研究 10（1）や梅澤、高島、八代「体育事務の研究：事務の体系化」（1968）体育学研究 12（5）などは代表的な業績ではないかと思います。梅澤先生を始め、当時の若手研究者の精力的な仕事なくしては、宇土体育経営学は結実しなかったのではないか、というのは言い過ぎでしょうか。二つ目は、それまで学校や地域を中心としていた体育経営学に、フィットネスクラブを中心に民間スポーツ施設やクラブ経営の研究成果によって厚みを加えられたという貢献です。梅澤先生が、本学会の研究集会を中心としてこの領域で精力的に活動されていたことが思い出されます。代表的かつ海外学会誌への先駆的な業績として、”Use of fitness facilities, equipment and programs -A case study of Japanese fitness club－”、Journal of Sport Management(1999)があります。それによって、本学会において民間フィットネスクラブの実務家との研究交流が活発となり、研究フィールドが拡大したのは間違いありません。三つ目は、JSM への論文投稿でもわかるように、本学会や研究領域の国際化に対する貢献です。梅澤先生は、二度にわたり在外研究期間を英国で過ごされ、外見も英国紳士然としておら

れましたので、私と同じ東北出身と知った時は驚き、親近感が増したのを覚えています（退職後、念願の英国王室ご用達のジャガーを愛車とされました）。海外は、1988 年のソウル五輪の科学会議でご一緒したのが初めてでしたが、その後 EASM の第3回学会大会（1995 ブタペスト）、NASSM でも複数回ご一緒することができました。アジアスポーツマネジメント学会副会長への就任は、先生の国際的な活動を象徴するものと言えましょう。

今あらためて梅澤先生の足跡を辿る作業を通じて、先生の“先駆性”に畏敬の念を禁じえません。まさに進取の精神を実践された先生を偲び、後輩としての至らなさを省みるとともに、次の世代に繋いでいくことに一層努力していくことをお誓いしたいと思います（スコッチで献杯）。

梅澤宣雄先生の御略歴

西暦	略歴
1935 年	福島県福島市生まれ
1954 年	福島県立福島高等学校　卒業
1958 年	東京教育大学体育学部　卒業
1960 年	東京教育大学大学院修士課程体育専攻科　修了
1960 年 - 1965 年	早稲田大学早稲田工業高等学校　教諭
1965 年 - 1969 年	早稲田大学教育学部　専任講師
1989 年 - 1978 年	同大学　同学部　助教授
1978 年 - 1990 年	同大学　同学部　教授
1990 年 - 2001 年	同大学人間科学部　教授
2001 年 -	早稲田大学名誉教授
体育・スポーツ経営学関連学会・実践における主な役職等	
日本体育経営学会（現日本体育・スポーツ経営学会）副会長 日本体育学会体育管理専門分科会（現専門領域）運営委員長 アジアスポーツマネジメント学会副会長 所沢市西地区総合型地域スポーツクラブ監査	
主な著書	
体育科教育法入門（1986）大修館書店 体育経営学講義（1989）大修館書店 [最新]学校体育経営ハンドブック（1994）大修館書店	

梅澤宣雄先生を偲ぶ

大内　勝夫

梅澤宣雄先生、昭和10年のお生まれ、まだまだ早すぎるご逝去でした。

梅澤さん(あまり先生とお呼びしたことがないもので)と仕事や遊びをご一緒させていただいたのはもう半世紀も前のことになります。記憶が定かでなくなったことも沢山ありますが、いくつかの出来事を思い出し、在りし日の梅澤さんを偲ぶよすがとしたいと思います。

今、テーブルの上で、茶色く変色した「体育学研究　第6巻第1号　日本体育学会第11回大会記録昭和36年9月」を開いています。

この中に「運動生活の階層に関する体育管理学的研究」というタイトルの研究発表の概要が記されています。発表者は当時東京教育大学体育管理研究室で教務補佐員をされていた梅澤宣雄さん、共同研究者は宇土正彦先生と私。

会場であった早稲田大学の人気のない教室で、初めての発表に緊張しながら、原稿を何度も読み返していた梅澤さんの姿が、今でも目に浮かびます。

勿論、宇土先生をはじめ先生の指導を受けた先輩方により体育管理の研究が進められてはいましたが、この学会での研究発表が以後の体育経営管理学研究の系統的、組織的発展につながったはじめの一歩であったことは間違いありません。

この学会発表を契機に、東京教育大学体育管理研究室を拠点とし、宇土先生を中心とした研究グループが発足、卒業生と現役の研究室生が集まり体育管理、学習指導等に関して活発な研究活動が行われるようになり、多くの学会発表も行われるようになりました。

その後、東京教育大学以外の研究者も一緒になり、学会活動もさらに活発化、これらの動きが1964年日本体育学会体育管理専門分科会の設置承認に繋がり、ひいては日本体育・スポーツ経営学会の設立へとも繋がっていったものと思っています。

これらの活動の中で、たとえば専門分科会運営委員長など、いつもまとめ役を果たしてくれたのが梅澤さんでした。ご苦労をおかけしました。

ウイスキーがお好きだった梅澤さんとはよく飲みました。テニスも何度となくご一緒しました。

当時、東京教育大学体育管理研究室で毎年恒例として行われていた宇土先生ご指導による調査研究旅行を長崎でおこなったことがあります。その帰りに梅澤さんと出雲に立ち寄りました。まだご結婚前の梅澤さんは出雲大社でおみくじを引き一人遠くの木に結びつけに行き、戻ってきたときの笑顔を今でも思い出します。心からご冥福をお祈りいたします。

合掌

～＊～

梅澤宣雄先生をしのんで

八代　勉（前会長）

梅澤先生が亡くなられてすでに6ヶ月が経過しました。会報の発行時期との関係で、会員の皆様にこの悲報が届くのがあまりにも遅くなってしまいました。故人との関係が公私ともに深かったものの一人として、先生のご逝去に際し、本会への先生の多大の貢献に対する謝意と哀悼の意を表する一文をしたためさせて

いただきました。

先生は本会の前身である体育管理学会の創設期からの功労者でありました。江尻先生、大石先生、宇土先生などを支える数少ない若手研究者として会の発展に尽力されました。

さらに、現在の日本体育・スポーツ経営学会の創設から今日に至るまで永年にわたって会にとって無くてはならない存在でした。運営委員を長く務めていただいたあと、研究誌の編集・発行、そして副会長としてご活躍いただきました。その間の、先生の特筆すべき発言と活動を2つ紹介しましょう。

昭和58年度の日本体育管理学会から現在の日本体育・スポーツ経営学会への改称・改編に際して、梅澤先生はこの会の名称について「体育」、「管理」等の言葉を用いない「日本スポーツ経営学会」を主張されました。今にして思えば、この名称でのぞんでおれば、今日の状況は大きく変わっていたことが予想されます。

アジアにおけるスポーツ経営関連学会の創設に尽力されたことも特筆すべき功績です。中国、韓国、台湾、香港などへ出向きアジアスポーツマネジメント学会の創設に尽力されました。それ以降、会としては、国際的な事柄に関しては梅澤先生にお願いするということが多く見られました。30歳代に在外研究員として英国のリーズ大学へ留学され、氏のその後の生き方を大きく変えたように思われます。度重なる渡英によって英語の力はいうに及ばず、国際人としての思考や行動の仕方をずいぶん高められたように思います。

研究者としては、早稲田大学につとめる傍ら、東京教育大学体育学部の教務補佐としてスタートを切られました。宇土先生の直属の研究者として現在の体育・スポーツ経営学の基礎づくりに尽力されました。経営組織論とスポーツ事業論に軸足を置いて自らの研究を深めると同時に若い研究者のリーダーとして多くの研究者志向の若者を育ててこられました。

イギリス仕込みのスマートなお酒のたしなみ方も教えていただきました。生涯を通じてテニスやゴルフを楽しまれました。最後の最後まで学会大会にもおつき合いくださいました。鋭さと優しさを併せ持つ魅力ある人間、梅澤宣雄先生！ありがとうございました。

ご冥福をお祈り申し上げます。

～＊～

梅澤先生を偲ぶ

本間　浩輔（ヤフー株式会社　執行役員ピープルデベロップメント統括本部長）

「君を僕の後継者の3番目にしてあげるから、筑波にいってマスター（修士）をとりなさい」

山下公園の近くのバー「MELLOW　CLUB」で梅澤先生にそう言われました。今から 20 年近く前のことです。梅澤先生は覚えていないと思います。大胆なのか軽卒なのか、今思い返すと梅澤先生らしい一言でした。

その後、僕は筑波大学の大学院に進学することになりましたが、進学の理由が梅澤先生の指示であったのか、もしくは別の理由があったのかは思い出せません。しかし、今でも記憶に残っていることから考えると、大学院進学の1つのきっかけであったことは間違いないことだと思います。

筑波に行って僕の人生はかわりました。筑波に行かなければスポーツ・ナビゲーションを起業することはなかった。2年前に人事異動でスポーツを離れるまでの 12 年間にわたり、スポーツに関わることができたのは梅澤先生のおかげです。

現在は、スポーツから離れて人事の仕事についていますが、僕が本格的に人事に関わったのは、スポ

ーツ・ナビゲーションが初めてであり、その後大学院で人事領域を勉強するようになったのも、梅澤先生の影響が大きいです。本当にありがとうございます。

「豊かなスポーツライフの実現」をスポーツ事業のビジョンとすべしという梅澤先生の教えは、僕がスポーツビジネスに関わるときに常に意識してきたことです。梅澤先生の教えがなければ、僕はビジネスサイドしか意識できないサラリーマンであったと思います。

先生の教えがあったからこそ、スポーツ・ナビゲーションやヤフースポーツでのビジョンにブレはありませんでした。また、ヤフーは6年にわたりJOCスポンサーになりましたが、先生の教えがあったからこそ社内を通すこともできたし、6年間も「地に足ついた」施策をうつことができました。

先生と調査した長野オリンピックでは、「経営学は普段調査費がかからないのだから、こんなときこそ使うぞ」と、少なくない金額を調達して頂きました（先生の個人負担も相当あったことを僕たちは知っています）また、議員の事務所や文部省に行って、調査の便宜を要望するなど、ここぞという時の先生の行動力には驚きました。あのとき一緒に調査をした仲間とは、今でも強い絆で結ばれています。

梅澤先生。東京オリンピックの開催が決まり、民間企業はオリンピックをどう活用するかが、1つのテーマになっています。ヤフーも例外ではありません。僕の担当が人事であるにも関わらず、こうやってスポーツに関する意思決定に関わることができるのは、長野オリンピックでの経験があったからです。また、今年からソフトバンクホークスの取締役を兼務していますが、人事担当の僕がこの職につけるにもスポーツのキャリアがあったからです。

梅澤先生の後継者にはなれませんでしたが、異なるフィールドから「豊かなスポーツライフ」の実現に努力していきます。天国から見守っていてください。梅澤先生、長い間、本当にありがとうございました。さようなら。

～＊～

梅澤先生からの教え

石井　十郎（神奈川大学）

昔は鬼のように厳しかったという梅澤先生。本学会の先生方も、梅澤先生との様々な思い出をお持ちであろうと思います。教育大時代の若い先生、体育経営学会時代の先生の姿、松葉杖で参加された南山大会の先生など。私は梅澤ゼミの最後の卒業生として、調査や国内外の学会へ同行させてもらいながら、公私にわたりご指導を頂きました。また、先生のご自宅がある大泉学園や吉祥寺の居酒屋を行き尽してしまうほど、梅澤先生と語らえる機会を多く頂きました。先生と過ごした思い出から、ゼミ生の前での姿や、よく話されていたことを書きたいと思います。

教え子の前では、どんな先生であったか？

愛車 Jaguar をジャグアーと呼ぶ英国紳士な先生。

煙草とコーヒーを手にゼミで話す The 教授な先生。

教え子達の職場にふらりと現われる気さくな先生。

卒業生に囲まれると酔っ払うまで飲み、奥様に叱られる先生。など

梅澤ゼミに入ってから 16 年間、様々な表情をもつ梅澤先生に接することができました。その中でも、もっとも印象深く、惹きつけられた姿は、教え子達の活躍を幸せそうに話される先生でした。

「最後の研究を浩輔とできて、本当に楽しかったなぁ。忙しく活躍しているようだけど、後

輩の面倒をよく見てくれて、あいつは兄貴肌だなぁ」

「今度、前橋に行こう。倉林君がやっているテニスクラブを見ておいた方が良い。会員のレベルが皆高くて、雰囲気もとても良いんだ。どんな工夫をしているのか聞きに行こう。勉強になるぞ」

「慶太を知っているか？スポーツで飯を食うのが大変な中で、自分でスポーツイベント会社を興して、ツールドチャイナまで開催しているんだ。彼も彼のお父さんも人格者でなぁ。会社が良くなるように手伝いたいなぁ」などなど

ゼミ生の名前と顔、仕事を全て記憶しているのでは？と思えるほどに、先生は一人一人を気にかけておられました。特にスポーツの仕事に就いた卒業生には、「もう現場の事は、君の方がよく分かっているのだから、教えてくれ」と言いながらも、最後には丁寧な意見を下さり、頼りになる先生でもありました。梅澤先生と会うと、卒業生達の話を幸せそうにされていました。そんな風に一人一人の教え子を思う先生だからでしょうか？古希のお祝い会に松葉杖をつきながら現れた先生でしたが、会場で横になって寝てしまうほどにワインを飲まれて、最後には教え子の肩に支えられ、後ろから奥様に叱られながら帰る、そして置き去りにされた松葉杖を卒業生達が持ち、微笑むという出来事がありました。こんな先生の姿が、「うめ『ちゃん』」とゼミ生から呼ばれていた所以だと思います。

私自身は、「製造者責任だ、君が就職するまでは！」と、最後まで心配をかけていた学生でした。そんな私に先生は、「十郎君、仕事は人間関係だぞ」と言って、先生方が学生だった頃の話や、学会での出来事、また AASM を一緒に設立された海外の先生のことまで、一人一人との係りを丁寧に話して下さいました。勿論、同じ話を何度も話されることもありましたが、それだけ梅澤先生の心に刻み込まれた大事な話で、先生方の尽力や協力によって学会活動が繋がってきていることを教えて頂きました。逝去された 2 日前には、「そう言えば、講義のコツを伝えてなかった。」と夜中、こっそり病院から電話をくださり、「美味しいコーヒーがあるから、明後日病室で会おう！話したいことがたくさんあるんだ」と最後の最後まで助言を送って下さり、私もまだまだ梅澤先生と話したいこと、教えて頂きたいことがあり、至極残念な思いです。先生が逝去されてから半年程が経ちましたが、梅澤先生がいつものように目の前に現れて、声が聞こえてくるようです。梅澤ゼミ卒業生の一員として、先生からの教えを大切にして、先生が蒔かれた種がさらに実を結ぶように仕事と研究に取り組むことが、先生のご恩に報いることだと考えております。

私達一人一人を大切にして下さった梅澤先生に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

＜AASM 北京にて＞

＜AASM ボードメンバーと＞

■ コラム　ーいま思うことー

体育・スポーツ経営学の力

理事長　清水　紀宏（筑波大学）

もはや戦後ではない」（昭和 31 年経済白書）。この宣言から8年後、私が3歳の時、東京にオリンピックがやってきました。もちろんその記憶はほとんどありませんが、その後の高度経済成長時代の凄まじい息吹をひしひしと感じながら幼少年期を過ごしました。生まれた頃のわが家は決して豊かとはいえない状態でしたが、それでも三種の神器（白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫）、3C（カラーテレビ、クーラー、自動車）などといったイノベーションが次々と揃えられ、日々の生活をみるみると新しくしていきました。「鉄腕アトム」を見て育った私たちは、この国の右肩上がりの成長はいつまでも続く、そんな根拠のない展望を庶民の誰もが描いていました。もしかしたら、私の世代は、人類史上最も平穏で夢のある豊かな国と時代に多感な少年期を過ごすことができたのではないか、そんなラッキーなジェネレーションだと今になって思います。生きることに苦労はなく、子どもは家事から解放され、自分のことだけ考えていればいい、子どもの本分はテストで少しでもいい点数をとることだけでした。本当に楽をして大人になってしまったものです。ですから、今の時代を昭和期と比べて語るのは酷なのかも知れません。

戦後わが国の急速な復興と経済成長はなぜ成功したのか、その原因は多々あるのでしょうが、一言でいえば「ニッポンの力」が優れていたからだと思います。そして、その力を培えたのは、狭い国土に急激な人口増加という好条件に恵まれたからです。第一次ベビーブーム時代に産まれた「団塊の世代」が、一斉に「モーレツ社員」「企業戦士」となって生産活動に邁進する。そうした真面目な多くの労働者たちの活躍がニッポンの力の原動力となり「経済大国」と「一億中流社会」を同時に達成したエクセレント・カントリーを築いてくれたのでしょう。また、多くの多様な日本人が、自由に自分の得意分野を極め、実に多様なジャンルでエクセレント人材が輩出され世界の評価を高めました。

しかし、今はその原動力が急速に衰退しつつあるように思います。未婚と離婚の増加、出生率の低下など人口減少に拍車がかかり、たとえ子どもが生まれても医者不足、待機児童、お受験、虐待にいじめなど、子どもが育つ環境は過酷なことばかりです。また、“勉強をしていい大学へ、そしていい会社へ”というサクセス・ストーリーも今や神話と化し、がんばる気力も希望も萎えさせる。そんな時代の中で育つ若者たちが、三無主義（無気力・無関心・無責任）の気質をもつのも無理はありません。目を覆うばかりの子どもの“ライフハザード”も時代のなせるわざと嘆くしかないのが現実です。こうした不安定・不確実な社会に加えて、度重なる自然災害と原発事故等の人災が重なり、「ニッポンの力」に将来不安を感じざるを得ません。日本は少子高齢化に代表される難問先進国である一方で、その解決にあたる世代（若者）の質と量の減少というダブルパンチの状況にあります。

こうした暗い世相の中で、にわかに「スポーツの力」への期待が高まってきています。基本法や基本計画そして五輪立候補ファイルには、国民の健康増進と長寿社会の実現、人格形成、地域再生、国民経済の発展、国際平和への貢献、国際的地位の向上そして震災復興にいたるまで、ありとあらゆるスポーツの効用が並べ立てられました。一見、万能薬とも思えるようなこうした「スポーツの力」はどこまで学術的根拠があるのでしょうか。例えば、わが国のすべての人々に提供されてきた体育の授業は、子どもた

ちの生涯生活にとって一体どれほどの力があるのか。学習指導要領改訂のたびに体育の存続危機論が聞こえてくるのは、学校体育という最も長い研究史をもつ分野ですらも自信をもってその力を示せていないことに原因の一つがあるように思います。しかし他方で、体育やスポーツの研究を生業とする私たちは、「スポーツの力」が決して幻想ではないと信じたいものです。

ところで、「スポーツの力」は、優れたスポーツ経営なしでは発現しませんし、却ってスポーツの「負の効果」(例：体罰死)が牙を剥くことにもなりまねません。経営の対象と目的に合わせて、スポーツの力を効果的に引き出すサービスを構想し、その生産のために必要な資源を調達して最適に組み合わせる、そうした高度な知識と技術が経営には必要とされます。スポーツの力は、「スポーツ経営の力」を前提とするのです。そして、スポーツ経営の力のある組織体と力のない組織体にはどのような違いがあるのか、スポーツ経営の力をもつためには何が必要なのか、スポーツ経営の力はスポーツの力をどのようにして高めるのか、こうした一連の問いに答えることが「体育・スポーツ経営学の力」だと考えます。

今、深刻な格差化という社会的問題を抱える先進国を中心に、学力格差や健康格差と社会階層（学歴・職業・所得など）との関連に関する研究が進み、その関係の強固さゆえに、学校や地域社会は格差の是正に無力なのではないか、いや、むしろ格差拡大に荷担しているのではないかという疑念が持たれています。このように、あらゆる科学が自らの研究対象のもつ「力」の実証力を試されているのだと感じています。

本年度も引き続き、学会運営へのご協力と会員の皆様の意欲的な研究成果の発表をよろしくお願いいたします。

■本年度の研究集会

日本体育・スポーツ経営学会第 48 回研究集会
及び　東北学院大学教養学部地域構想学科特別講義

テーマ：震災復興とスポーツの力

天野　和彦（東北学院大学）

【プログラム】

◇受付　12:30～（記帳のみ行いますが、学会員の方には配布資料をお渡しいたします）　220 教室前

Ⅰ　基調講演　「大震災が地域 NPO にもたらしたものとは」

◇松村　和則　氏（筑波大学）

13:00-14:00　泉キャンパス 2 号館　220 教室

Ⅱ　講演　「障がい者スポーツからアダプテッド・スポーツへ　-災害に備えたつながりづくり-」

◇行實　鉄平　氏（徳島大学）

14:00-14:30　泉キャンパス 2 号館　220 教室

Ⅰ及びⅡ　司会　植田　今日子（東北学院大学）

<休憩及び教室移動>　→　（この時間に、地域福祉実習室前にて改めて受付をさせて頂きます）

Ⅲ　パネルディスカッション「震災とスポーツクラブ」

○復興支援とスポーツの潜在力

木間　奈津子　氏（NPO 法人アクア夢クラブ）

後藤　小百合　氏（NPO 法人多賀城市民スポーツクラブ）

其田　　雅美　氏（東北学院大学　災害ボランティアステーション運営委員）

15:00-16:30　泉キャンパス 5 号館　地域福祉実習室

ファシリテーター　天野和彦（東北学院大学）

Ⅳ　閉会挨拶

柳沢和雄（日本体育・スポーツ経営学会　会長/筑波大学）

開催趣旨

東日本大震災から 3 年が経ち、宮城県をはじめとした東北 6 県のスポーツ環境は徐々にではあるが日常を取り戻しつつあります。しかし、この震災によって活動内容を大きく変化させたクラブも少なくありません。会員確保、指導者不足、会費と言った総合型地域スポーツクラブに付随してきたこれまでの恒常的な課題とは異なるものが各クラブに重くのしかかっていました。その一方で、地域と一体化する機会を前向きに捉え、積極的なスポーツを通じた支援活動を行ったクラブも多く存在しているのも事実です。

本会では、県下における震災後のクラブ活動に焦点をあて、各クラブの実際の声をその場で可能な限り集約し、震災と地域の繋がりと総合型スポーツクラブの関係性を再確認することを目的としています。また、震災後に生まれた現場での様々な知見、時にはスポーツの枠を越えた活動も含め、それらを多角的な視野にてクラブ関係者と研究者が共有し、今後のクラブ活動の方向性を見いだす機会としたいと考えていますので、どうか奮ってご参加くださいますようお願いします。

◆日時：2014 年 9 月 27 日(土)　13:00～17:00

◆場所：東北学院大学　泉キャンパス

〒981-3193　宮城県仙台市泉区天神沢 2-1-1

仙台市地下鉄南北線　泉中央（いずみちゅうおう）駅下車　「泉キャンパス前」行きのバスにて 10 分

http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/access/（ご参照ください）

◆参加費（資料代を含む）：　正会員 1500 円

学生会員 1000 円　一般（社会人）2000 円

一般（学生）1000 円

※東北学院大学の学生及び宮城県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会メンバー、仙台市のスポーツ推進委員の方は無料です。

◆定員：基調講演及び講演は 200 名、パネルディスカッションは 120 名
◆主催：日本体育・スポーツ経営学会、東北学院大学
◆共催：宮城県体育協会
◆後援：仙台市、宮城県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会
◆参加申し込み方法・お問い合わせ先
　下記のお問い合わせ先に、メールや FAX、もしくはお電話のいずれかの方法で
　①氏名、②連絡先（御住所、電話番号、メールアドレス）、③ご所属をご連絡ください。

講師略歴

★松村　和則氏
教育学博士（東北大学）/日本スポーツ社会学会理事/国際スポーツ社会学会理事他
主な著書：「現代スポーツの社会学」南窓社、「食・農・からだの社会学（増訂版）」南窓社他

★行實　鉄平氏
体育学修士（筑波大学）/日本体育・スポーツ経営学会会員/日本体育協会スポーツ少年団リーダー養成 WG 委員他
主な著書：「障碍者スポーツの可能性」大学図書出版、「市民参加のまちづくり　地域の自立と持続可能性」創成社他。

〈お問い合わせ先〉
〒981-3193　宮城県仙台市泉区天神沢 2-1-1
東北学院大学　教養学部　天野和彦研究室（3 号館 6 階 3627 号室）
℡：022-773-3396　Fax：022-375-3472（地域構想学科合同研究室）
E-mail：amano1965@gmail.com

～＊～

日本体育・スポーツ経営学会第 49 回研究集会（予定）

テーマ：これからの子どものスポーツ環境を考える

竹下　俊一（鹿屋体育大学）
武隈　　晃（鹿児島大学）

■趣旨

昨年 12 月に大阪教育大学附属高等学校平野校舎で開催された第 46 回研究集会 では『「子どもが育つ環境づくり」を考える！』というテーマで，暴力ではなく，ルールに従い相手を尊重するという民主主義の基本を学べる「スポーツ活動の場や機会」などを子どもたちが育つ環境条件の一つとして保障していくには，どのような「子どもスポーツ経営」が必要なのだろうかといった課題が検討されました。今年の第 49 回研究集会では、引き続き子どもたちにとってのスポーツの環境に焦点を当ててみました。長い人生においてもスポーツに触れる初期段階である幼児期や児童期に、どういったスポーツ環境を用意し提供していけばよいかについて総合的に考えていこうと「これからの子どものスポーツ環境を考える」というテーマを設定してみました。

基調講演として NHK 教育テレビ番組「あさだ！からだ！」監修をされている中村和彦先生に幼少児のための運動プログラムの開発や子どもに適した運動環境についてのお話をいただき、また幼児期の運動や精神面の発育発達の立場から森司朗先生に、幼児期・児童期の運動・スポーツに関する政策について元文部科学省スポーツ・青少年局企画・体育課教科調査官の佐藤豊先生に講演をいただき、これからの子どものスポーツ環境について考えていきたいと思います。さらに特別講演として先の東京オリン

ピックを前にした 1962 年、日本スポーツ少年団の創設に関わられた飯塚鉄雄先生に立上げ当時の「スポーツを通じて青少年のからだとこころを育てる組織づくり」のお話も予定しております。

■テーマ
「これからの子どものスポーツ環境を考える」
■講師:　中村和彦(山梨大学教育学部教授)
森司朗(鹿屋体育大学体育学部教授・学長補佐)
佐藤豊(鹿屋体育大学体育学部教授)
飯塚鉄雄(東京都立大学名誉教授,至学館大学名誉教授)
■日時:平成 26 年 12 月 20 日(土)13:00～17:00
■会場:鹿児島大学教育学部 101 号教室
〒890-8580
鹿児島県鹿児島市郡元　1−21−24
ホームページ:*www.kagoshima-u.ac.jp*
■定員:　200 名
■参加費:(テキスト代を含む):2,000 円(予定)
■連絡先:鹿児島大学教育学部武隈研究室
TEL:099-285-7762
メール:takekuma@edu.kagoshima-u.ac.jp
鹿屋体育大学体育学部竹下研究室
TEL:0994-46-4921
メール:takesita@nifs-k.ac.jp
●プログラムの詳細についてはホームページ等で連絡いたします。

～＊～

日本体育・スポーツ経営学会第 50 回研究集会(予定)

テーマ:総合型地域スポーツクラブの本質を問うV「地域スポーツクラブとジェンダー」(仮題)

作野　誠一(早稲田大学)

■趣旨

日本体育・スポーツ経営学会では、これまでに 4 回にわたって「総合型地域スポーツクラブの本質を問う」と題する研究集会を開催してきました。今年度の第 50 回研究集会では、その第 5 弾として、「地域スポーツクラブとジェンダー」というテーマのもと会員のみなさんとこれからのクラブのありようについて考えたいと思います。

ご存知のように、先に公表された「スポーツ基本計画」(2012)では、政策目標のひとつとしてスポーツ界における透明性、公平・公正性の向上をめざすことが明記されました。スポーツ団体のガバナンスを強化し組織運営の透明化を図ることは、競技団体はもちろん、地域スポーツクラブにも強く求められるところです。中央競技団体現況調査(SSF, 2011)によれば、わが国の競技団体の役員は、男性が 92.0%、女性が 8.0%であり、女性の役員の割合が極端に少なくなっています。回答のあった 79 団体のうち、35 団体(44.3%)には女性役員がおらず、女性役員が 2 人以下の団体が全体の 9 割を占めていることもわかっています。総合型地域スポーツクラブにも質的な成熟が求められる今日、われわれは身近なスポーツの場をめぐるジェンダーの問題にも積極的に取り組んでいく必要があると考えます。

本研究集会では、こうした状況をふまえ、地域スポーツクラブをめぐるジェンダーの問題について議論を深めることを意図しております。そこでの具体的な問題は何か、そしてこの問題に対してわれわれはどのように対応していけばよいのか、今後の地域スポーツ環境を考えるうえでも、こうした問題について検討することは非常に重要であると考えられます。

■テーマ:
総合型地域スポーツクラブの本質を問うⅤ
「地域スポーツクラブとジェンダー(仮題)」
■日時:平成 27 年 1 月 24 日(土)13:00～17:00
■会場:筑波大学東京キャンパス文京校舎
〒112-0012　東京都文京区大塚 3-29-1
地下鉄丸ノ内線茗荷谷(みょうがだに)駅
下車「出口 1」徒歩 2 分
http://www.tsukuba.ac.jp/access/bunkyo_access.html
■定員:　200 名

演者・プログラム等の詳細については現在検討中です。決定次第、会員のみなさまにお知らせいたします。

■第 37 回学会大会報告

日本体育・スポーツ経営学会第 37 回学会大会のご報告

第 37 回学会大会実行委員長　西原　康行(新潟医療福祉大学)

去る 3 月 19 日（水）から 3 月 21 日（金）までの３日間、新潟医療福祉大学を主管校として、新潟市内（会場：学生総合プラザ STEP）にて、日本体育・スポーツ経営学会第 37 回大会が開催されました。

今年の学会大会では、大会テーマを「スポーツマネジメント人材の力量」と設定し、スポーツの現場における経験から学ぶマネジメント力量に焦点をあて，帰納法的に実践と理論の往還を図ることを意図した「基調講演」と「シンポジウム」を開催しました。また、研究発表は、学生研究発表と一般研究発表を合わせて 33 演題が発表され、その内の約 7 割が大学院生の発表でした。

まず、基調講演では，様々な職場あるいは職業人を対象として豊富なフィールドワークやデータから経験学習論を展開されている北海道大学大学院経済学研究科の松尾睦先生をお招きして、「経験から学ぶ力と人材育成」というテーマでお話ししていただきました。松尾先生は、「経験からの学習：プロフェッショナルへの成長プロセス」「職場が生きる、人が育つ『経験学習』入門」をはじめとした多くの著書や論文を世に出しておられますが、神戸大学から北海道大学に移られたばかりの大変ご多忙な中をお越しいただき、参加者の内省を促しながらお話していただきました。職場においては、7 割が仕事経験からの学び、2 割が他者からの学び、1 割が研修や書籍からの学びであり、さらに 7 割の仕事経験も、「リフレクション（振り返る力)」「エンジョイメント（楽しむ力)」「ストレッチ（挑戦する力)」をもち、「思い」と「つながり」を備えていないと成長しないという『経験学習モデル』を中心にして、様々な企業の事例を交えながらお話していただきましたが、マネジメント力量を必要とする様々なスポーツの現場でも生かされるとともに、体育・スポーツ経営学の研究にも多くの示唆を与えていただいたと感じています。

松尾睦氏の基調講演

シンポジウムでは，新潟医療福祉大学の武田丈太郎氏を座長として 3 名の方々にシンポジストをお願いしました。「地域に密着したスポーツ環境を創るマネジメント力量」というテーマで，プロ野球独立リーグの代表を務めておられる村山哲二氏，ブルボンウォーターポロクラブを立ち上げた青柳勧氏，総合型地域スポーツクラブＮＰＯ法人クラブパレットコーディネーターの西村貴之氏からお話いただき，地域のスポーツマネジメントに携わっている実践の場の声を浮き彫りにしました。中央集権的なものごとの仕組みや価値観から、地域を主体とした自立した社会へのパラダイムシフトが叫ばれて久しいわけですが、スポーツを取り巻く環境では必ずしもそれが完全に醸成されているとは言い難い中で、確実に地域に根差したスポーツ環境を創り上げている 3 名の実践者のマネジメント力量に照射して、これからの社会潮流に必要となるスポーツマネジメント力量を探りました。１人目のシンポジストである村山哲二氏は、株式会社電通に勤務されていましたが，その職場を辞してゼロからＢＣリーグの立ち上げにご尽力されました。電通時代に培った力量がＢＣリーグ立ち上げのどのように活かされたのか，あるいはＢＣリーグ立ち上げで学んだ力量とは何かについて、苦労話を交えながらお話していただきました。続いて２人目のシンポジストである青柳勧氏は，筑波大学在学中にスペインに渡り，プロ 1 部リーグでプレーし，その後イタリアでセリエＡ１四強の一つであるブレッシアでプレーして日本人初のチャンピオンズリーグ出場も決めました。日本代表としても心的な活躍をしており、2010 年にクラブチーム「ブルボンウォーターポロクラブ柏崎」を発足させましたが、本シンポジウムでは、特にクラブチーム発足から今日に至るまでどのような創造性を発揮してクラブを構築してきたのかについて掘り下げてお話していただきました。３人目のシンポジストである西村貴之氏は，学生時代からＮＰＯ法人クラブパレットの前身であるクラブレッツという総合型地域スポーツクラブに関わり，現在は金沢大学特任助教として，実践現場と大学の二足のわらじを履きながら，地域コミュニティの再生や人材育成に取り組んでおり、大学人と実践者がどのようなスタンスで地域のスポーツ環境を創っていくのか，そしてどのような力量が問われるのかについてお話していただきました。３名に共通していることは、「マーケティング」と「イノベーション」をきちんと実践していることでした。ここでのマーケティングとは「社会の中で自分たちが何を必要とされているのかを知る」ということであり、イノベーションとは「マーケティングによって得られた知見にしたがって、自らを変革すること」ととらえることができます。つまり、ドラッカーのマーケティングとイノベーションの定義に符合した実践を行なっているということでした。

シンポジストの青柳勧氏

研究発表は、前述したように 33 演題のうちの約 7 割が大学院生であり、若手の学会参加者が研究発表を盛り上げてくれました。学会発表賞は 7 演題がエントリーして、残念ながら最優秀発表賞は該当者がいませんでしたが、優秀発表賞を筑波大学大学院の林田敏祐さん（演題：「運動部活動改革を主導する高校教師の持論に関する研究」）が受賞し、賞状と副賞（皇室の洋食器を手がける新潟県燕市の磨き屋シンジケートのビールタンブラー）を受けとりました。

一般研究発表の様子

また、懇親会は，越の寒梅，八海山、〆張鶴をはじめとした新潟の銘酒やコシヒカリのおにぎり等を用意したことが功を奏したのか、56 名の方々からご参加いただき、盛況に取り行なうことができました。なお、懇親会には八代勉先生と佐藤勝弘先生から特別なご厚情をいただいたことをご報告させていただきます。

最後に、本学会大会が盛況かつ無事に開催できたことは、108 名の学会大会に参加していただいた方々と、ご協賛いただいた株式会社大修館書店、株式会社日本体育社、大日本図書株式会社、仙台大学、東北学院大学、前田印刷株式会社のおかげと思っております。本当にありがとうございました。深く御礼申し上げて第 37 回学会大会の報告とさせていただきます。

学会大会に参加して

醍醐　笑部（早稲田大学スポーツ科学研究科）

先日、第 37 回日本体育・スポーツ経営学会に参加し、様々な大学の先生方や学生のみなさんと交流することができた。

筆者は、本大会にて発表した内容（題：スポーツ観戦・芸術鑑賞に基づく“みる力”の提案）の一部を、その後 6 月台湾にて行われた AASM で発表した（題：The growth process of a dance critic）。そこで感じた違いから、本大会の感想を述べようと思う。

一つ目は筆者個人の発表についてである。質疑応答において研究対象であった舞踊鑑賞を超えてスポーツ観戦（むしろ身体をみるということや運動をみるということ）への意見をもらうことができた。本学会では、同じ種目や環境を研究の現場としていても背景的知識、身体への思想が異なるために、多様な学問からの応用が活発になればなるほど議論が行き詰まり、深まらない場面が見受けられる。種目や環境の共通性ではなく、研究の方向性をも考えさせられる。すぐに答えの出ない質疑は筆者にとって学びの多いものであった。研究を広い視座から捉え、考える姿勢は、研究を継続している今でも心にとめていることである。

一方、AASM での発表は、質疑や意見を交わす相手の状況がまさに千差万別である。これまでの教育、現在の研究環境、立場、流行などが国や研究者によって多様であり、それゆえ研究内容や方法に創意工夫が生まれ、各国のスポーツ文化が発表から感じられた。しかし、母国語でない言語を手段に発表を行う場合、発表者の扱うテーマ以上に大きなスケールでの議論は高い言語能力が必要であり、困難が伴うように思った。また、参加者の状況が様々であるということを最も強く実感したのは研究の考察や展望の部分であった。スポーツの負の部分が明らかになったり、未来に影を落とすような結果について一言付け加えた発表は、結果を真正面から受け止めたものだと感じた。筆者は往々にして、そのような知見を含むような結果にむりやり理由づけをしようとディフェンシブになりがちであり、クリティカルな批判やスポーツの危険性を議論の俎上に上げる傾向は、スポーツ愛好型ともいえる本学会の発表において今後学ぶべき姿勢であると感じた。

さらに、筆者は AASM にてポスター発表を選択した。これは考察に使用した図を詳しく扱いたいというビジュアル面による希望と、英語での質疑応答に多少の不安があったことが理由である。留学生や多様な研究機関からの発表者が想定されるいま、口頭発表だけでなく、ポスター発表、ワークショップ、パネルディスカッションなどが本学会でも検討され、多様な発表方法が選択できればと思う。

二つ目はシンポジウムなど学会の共有知として扱うテーマについてである。学会 2 日目のシンポジウムでは「地域に密着したスポーツ環境を創るマネジメント力量」について講演が行われ、新潟のスポーツ環境、地域に生まれる不可視な状況を当事者であるシンポジストから感じ取ることができた。

筆者自身このシンポジウムには特別な思い入れがあった。一年前の本学会の懇親会にて、シンポジストの一人である新潟産業大学、現役水球選手の青柳勧さんを呼んではどうかと実行委員長である西原康行先生へお願いをしていたからである。学生からの要望に反応して頂けたこと、日本におけるマイナースポーツを取り上げることができたこと（しかも世界ではトップレベルの選手に）に、本学会の柔軟さと、学生・教員・研究者同士のつながりを心地良く感じ、大学院生である私が学会大会の企画の一助になれたことに、本学会が多様性を内包する可能性を感じた。

地域を限定してひとつのテーマについて知を体系化することは、国際学会において発表・発信することは出来てもなかなか理解・享受することが難しいと感じている。今大会のシンポジウムで言えば、新潟の事例が日本という範囲で捉えられる。それはどのような単位におけるテーマ設定であっても発生する問題ではあるが、今回のシンポジウムは特に地域の企業名や地理的条件によって理解する部分が大きかったように思う。西原先生の「学会大会のご案内」における言葉を借りれば「確実に地域に根差したスポーツ環境」こそドメスティックに腰を据えて扱うテーマであり、シンポジウム等でこうした強みを発揮していくべきではないかと感じた。

以上、第 37 回体育・スポーツ経営学会と AASM2014 において重なりのある内容で発表を行った筆者からの本大会の感想である。本学会は日本国内の学会だが、海外から多くの知見を受容している。ドメスティックな強みを生かしながらも今後筆者や同世代が研究の場としていくにあたり、すでに本大会がある程度の多様性を含んでいることに気付く必要があると感じた。そのためにも、単なるスポーツ愛好家の集まりではない多面的な価値観、ポスターやワークショップ等の発表方法の多様化、さらには参加者の多様性を受け入れる柔軟性が必要である.感想

文までも本大会のテーマ「スポーツマネジメント人材の力量」に触れることができるのであれば,筆者自身が大学院生として参加し、感じ学んだことをさらに発信する「力量」のある人間でありたいと常に感じており、このような執筆の機会に大変感謝する次第である。

学会大会に参加して

常浦　光希（岡山県高梁市立宇治高等学校）

本学会は、昨年に引き続き 2 回目の参加となりました。岡山での日常は同じ学問を学ぶ仲間が近くにいないため、他大学の先生のご指導や大学院生の方々に意見を頂ける学会大会は大変貴重な時間でした。また、同世代の大学院生による多くの研究発表から自分自身　の研究とは異なる研究に触れる体験は、自身の研究の幅を広げる良い刺激になりました。

今回の学会では、修士論文をベースに発表させていただきました。振り返ってみると、これまでの調査・研究活動と学会発表は切っても切れない関係にあったと感じています。自身の研究を進めていく中で、特に研究方法に関して、つまずくことがありました。そのような中、研究発表の時間は、研究を進めるにあたって、研究方法から得られる結果や考察の参考になりました。研究発表後の質疑においても、研究方法の課題や問題から、自身の研究の課題が見えてくる良い機会となりました。また、何気ない時間に、他大学の先生や大学院生の方々と話し合う機会から、研究を進める上でヒントを得ることがありました。学会大会に参加し、研究について、発表する時間や話し合う時間がとても重要であったと感じました。このような機会を体験することができたことで、岡山で過ごす日々も大きく変わりました。同じ学問ではない院生同士で集まる機会を設けるようになりました。現在行っている研究について発表する時間を通して、それぞれの研究について議論を行なう機会や、社会問題について討論するといった機会を作ることで、これまで以上に、話し合う時間が増えました。そのおかげもあり、自身の研究について、分かっているつもりになっていることや、研究課題や今後の見通しについて整理できるようになっていったと思います。次に何をすればよいかといったことがみえてくることで、有意義な時間を過ごせるようになりました。

一方、運動・スポーツ生活に関する修士論文に結実する研究では、運動・スポーツとの関わりが人によってあまりに多様で、どういった運動・スポーツとの関わりが望ましいのか、ということについて深く考えさせられました。特に、インタビューを通して生活者一人ひとりの意味世界を理解しようと取り組んできたこともあり、それまで私自身が考えてきた以上に、人と運動・スポーツとの関わり方は、複雑多様な情況であることを体感しました。また、できるだけインタビュー対象者の視点から当人を理解しようとしていたものの、語られていることをその人の感覚に沿って生々しく理解していくことは、インタビューを重ねるたびに難しさを感じました。しかしそれを面白く感じてもいました。

このような、修士論文と学会発表での経験は、今回の松尾先生による基調講演にもあったように、「挑戦し、振り返り、楽しみながら」というものだったと思います。研究を通して先生方や同世代の大学院生とつながる楽しい時間を学会大会で過ごし、研究を深めるためにはどうすればいいかという思いを新たに持つことができる。そして、再度課題と向き合い、新たな挑戦をしていく。この研究活動と学会大会の往還体験は、社会人としてこれから経験する多くの事が次の挑戦を導く上で生きてくるのではないか、と思いました。今後は、先生方や大学院生からいただいた成長する力を、自分なりにアウトプットしていけるように、さらに精進していきたいと思います。

■ 第 38 回学会大会のご案内

大会テーマ:体育・スポーツ経営学原点回帰
～人とスポーツの関わりを問い直す～

第 38 回学会大会実行委員長　藤井　和彦（白鴎大学）

2011 年 3 月に白鴎大学で開催予定であった第 34 回大会は直前に発生した東日本大震災により中止を余儀なくされました。震災後 4 年で再び学会大会開催の機会を与えていただきましたことに感謝申し上げます。

また、今大会は学会設立 30 周年の記念大会でもあります。こうしたことから大会テーマとして「体育・スポーツ経営学原点回帰～人とスポーツとの関わりを問い直す～」を掲げ、体育・スポーツ経営学の原点であり本質である運動者・スポーツ生活者と体育・スポーツとの豊かな関わりについて考えていきます。学会が蓄積してきたこれまでの視点を整理すると共に、さらに大所からスポーツとの関わりがもたらす心身や生活の豊かさを捉え直したいと思います。30 周年の記念大会が、これからの体育・スポーツ経営学の方向性を考える機会になれば幸いです。

今大会では初めての試みとして本部（理事会企画）シンポジウムも予定されております。大会企画と合わせて盛りだくさんの内容となりますが、東京駅から東北新幹線で 40 分程度、湘南新宿ラインでは池袋から 60 分程度、そして駅徒歩 1 分というアクセスの会場です。どうぞ 3 日間のプログラムにご参加くださいますようお願い申し上げます。

11 月末には正式なご案内ができることと思います。発表申し込みの締め切りは 1 月下旬、大会号原稿は 2 月下旬締め切りという例年通りのスケジュールで進めてまいりたいと思います。多くの会員の皆様のエントリーをお待ちいたしております。

＜大会概要＞　※日程は現時点での案です。各企画の配置は変更となる場合があります。

1. 会期　平成27年3月19日（木）～21日（祝）
2. 会場　白鴎大学東キャンパス（JR 小山駅東口より徒歩 1 分）
　　〒323-8586　栃木県小山市駅東通り 2-2-2　TEL（0285）22-8900
3. 大会日程

3月19日（木）	12:00～	受付
	12:45～	開会式
	13:00～13:50	記念講演 I
	14:00～15:00	学生研究発表（一般研究発表）
	15:00～17:30	一般研究発表
3月20日（金）	9:00～12:00	一般研究発表
	13:00～15:00	一般研究発表
	15:20～16:50	本部（理事会企画）シンポジウム
	17:00～17:45	総会
	18:00～20:00	懇親会（優秀発表賞表彰）
3月21日（祝）	9:00～ 9:50	記念講演 II（公開）
	10:00～11:50	パネルディスカッション（公開）
	12:00～	閉会式

■ 各委員会報告

研究プロジェクトの推進―プロジェクトメンバーの募集―

既に、メール及びホームページにおいて、周知しておりますように、本年度は下記の 2 つの研究プロジェクトを設置し、期間を限定した共同研究を推進することにいたしました。参加をご希望の会員は、学会事務局までご連絡下さい。共同研究への積極的なご参加をお願いいたします。

スポーツプロデュース研究プロジェクト

2020 年東京オリンピック・パラリンピックへの人々の関心の高まりに併せて、みるスポーツの文化価値を高めるために、スポーツプロデュースの在り方や具体的方策、さらに国民の観戦能力の育成方策の提案が期待されている。本プロジェクトは、みるスポーツを中心に、スポーツの面白さとは何か、どのようにプロデュースすべきか、またそのようなサービスを観戦する人々の観戦能力の基本的理解や能力向上させるためのサポート方法などを明らかにしていきたい。プロジェクト期間は 3 年間とし、2 ヶ月に 1 度の勉強会開催と、みるスポーツをめぐる、需要構造と供給構造の現状分析、先進事例調査等を実施していきたい。

エクセレントクラブ（地域スポーツクラブ）研究プロジェクト

本プロジェクトでは、持続的に成長するごく少数の総合型クラブを「エクセレントクラブ」と捉え、合理的な指標開発のための実証研究ならびにケース分析・事例研究を実施し、それらの結果をもとにクラブマネジメントの現場に立つ関係者に合意され、クラブの成長度合と関連の強い規準を探索・選定することをめざす。量的調査では、指標の開発と選定を行い、ケース分析では、エクセレントクラブの組織諸特性とともにクラブづくりのプロセスにも注目して詳細な分析を行う。プロジェクト期間は 3 年間とし、調査分析の報告、新たな調査設計、発表・報告準備など、2～3 ヶ月に 1 度の勉強会を開催するとともに、メンバーによる積極的な研究成果の公表を行いたい。

～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

実践（現場）対応委員会

実践対応委員会は、これまでに本学会が蓄積してきた知識・情報を会員間で共有することにとどまらず、広く社会や実践の場に還元していくというねらいのもとに設置されており、主に研究集会やフォーラムの企画・運営を中心に活動しています。今年度も本会報でご案内の通り、3 回の研究集会が予定されております。いずれもスポーツ経営をめぐるタイムリーな話題を取り上げておりますので、会員のみなさまの積極的にご参加をお待ちしております。

今後、より実りある研究集会としていくためにも、テーマや進め方などについて会員のみなさま方からのご意見をお待ちしております。

作野　誠一（早稲田大学）

～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

総務委員会

平成 26 年度会費、ならびに前年度までの未納会費のお振り込みをお願いいたします。

＜年度会費振込先＞

郵便振替：口座番号　00150-3-71496

加入者名　日本体育・スポーツ経営学会

銀行振込：常陽銀行　竹園出張所

口座番号　普通　1146488

口座名義　日本体育 スポーツ経営学会 代表清水紀宏

※ 銀行振込の際は、振込人の氏名が分かるようご留意ください。

※ 領収証が必要な方は、事務局までご連絡ください。

会費の自動引き落としをご希望される方は、お手続きが必要となりますので学会事務局までご一報ください。なお、自動引き落としのお申し込みをいただいた場合、次年度から（平成２７年度）引き落とし開始となります。予めご了承ください。

浪越　一喜（帝京大学）

～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

広報委員会

会報 65 号をお届けします。まず、予定よりも発行が遅れてしまいまして、会員の皆様にご迷惑をおかけしたことに深謝致します。

今号は、本学会に多大な功績を残されました梅澤宣雄先生を偲んで、追悼特集を掲載させて頂きました。大内勝夫先生、八代勉先生はじめ多くの方々にご協力頂き感謝申し上げます。

広報委員会では例年通り 2 回の会報発行とホームページの運営を行っていきます。ご意見やご要望、ホームページの運営についてお気づきの点がございましたらお聞かせください。

藤井　和彦（白鷗大学）

■ 会議報告

＜平成 25 年度　総会報告＞

期日：平成 26 年 3 月 20 日（水）17:00～18:00
会場：新潟総合学園学生総合プラザ STEP

1. 議長選出

議長に行實鉄平会員（徳島大学）を選出した。

2. 報告事項

清水理事長から総会資料に基づいて平成 25 年度活動報告と平成 25 年度収支決算報告がなされた。収支決算報告については決算が適正である旨、監査結果の報告がなされた（別表 1 参照，注 1）。

3. 審議事項

清水理事長から総会資料に基づき平成 26 年度事業計画案が説明され、承認された。続いて平成 26 年度収支予算案について説明が行われ、承認された（別表 2 参照，注 2）。次に、名誉会員規程の制定について審議が行われ承認された。さらに、佐藤良男会員、梅澤宣雄会員、高島稔会員、八代勉会員、松永淳一会員を名誉会員として推薦することを確認した。また、「理事の選出方法に関する内規の改正について審議が行われ承認された。

注 1　別表 1 は、2014 年 3 月 31 日時点における平成 25 年度の最終的な収支決算報告です。

注 2　別表 2 は、別表 1 の収支決算（2014 年 3 月 31 日時点）における前年度繰越金を踏まえた平成 26 年度予算です。

＜理事会報告＞

平成 25 年度　第 3 回常務理事会

期日：2014 年 2 月 18 日（火）18：00～20：00
会場：筑波大学東京キャンパス文京校舎 431 教室
出席：柳沢、木村、清水、川邊、小山、斎藤、作野、藤井、松岡、間野、朝倉（幹事）、今宿（幹事）
欠席：浪越

1. 報告事項

(1)第 47 回研究集会報告

事務局から第 47 回研究集会の参加者数および収支の報告が行われ，参加者数 131 名，収入 342,000 円、支出 246,811 円、収支の差し引きが 95,189 円であったことが報告された。

(2)名誉会会員規程

理事会での議論を踏まえて改正した「名誉会員規程案」を確認した。併せて、清水理事長から名誉会員の候補者として推薦した 5 名に現在、諾否を問い合わせていることが報告された。

(3)理事の選出方法に関する内規

理事会での議論を踏まえて改正した「理事の選出方法に関する内規」を確認した。

2. 審議事項

(1)笹川スポーツ財団ＨＰでの機関誌データ公開について

笹川スポーツ財団から、財団の研究助成を受けて公刊された機関誌『体育・スポーツ経営学研究』掲載論文および学会大会号の抄録データを笹川財団ホームページに掲載することの諾否について問い合わせがあり、本会としての対応について審議が行われた。審議の結果、論文や抄録のデータ全てを掲載するのではなく、題目や公開媒体の情報および CiNii などへのリンクを添付するなどして対応してもらうことを確認した。

(2)平成 26 年度事業計画について

①実践対応委員会

実践対応委員会の作野委員長から、次年度の研究集会事業の計画について提案がなされた。具体的には、地方開催を含めて学校体育関連（7 月～12 月）、スポーツ政策関連（9 月～11 月）、地域スポーツ関連（12 月～1 月）をテーマとした 3 回の研究集会開催が提案された。「学校体育」関連の集会については九州地区での開催を検討することが確認された。「スポーツ政策」関連の集会についてはオリンピックをテーマとして、スポーツ政策学会との共催を検討していくことが確認された。地域スポーツ関連については、継続的に行っている総合型地域スポーツクラブ関連の研究を引き続き進めることが確認された。なお、スポーツ政策関連については間野

【別表１】

平成25年度収支決算報告
一般会計

【収　入】　　3月31日 現在

項　目			平成25年度予算	平成25年度決算		増減（▲減）
前年度繰越金			2,478,874	2,542,334		63,460
会費	正会員	会計年度以前	100,000	188,000	*1	88,000
		会計年度	710,000	656,000	*2	▲ 54,000
	賛助会員		100,000	180,000		80,000
入会金			20,000	11,000		▲ 9,000
事業収入			150,000	196,658	*3	46,658
特別会計繰入金			20,000	0		▲ 20,000
収入合計（A）			3,642,334	3,773,992		131,658

*1　¥55,000増（正会員11名分）
*2　¥53,000増（正会員10名分、学生会員１名分）
*3　¥31,428増（学会大会残金）

単位：円

【支　出】　　3月31日 現在

項　目		平成25年度予算	平成25年度決算		増減（▲減）
体育･ｽﾎﾟｰﾂ経営学研究の発行	通信費	5,000	1,770	*1	▲ 3,230
	編集会議費	70,000	0		▲ 70,000
	編集諸費	25,000	60,000		35,000
	印刷費	400,000	385,875	*2	▲ 14,125
	発送費	20,000	24,085	*3	4,085
	人件費	90,000	60,000		▲ 30,000
学会大会運営	運営補助費	150,000	150,000		0
	優秀発表賞経費	20,000	21,305	*4	1,305
会報の発行	印刷費	30,000	29,278		▲ 722
	発送費	10,000	3,520		▲ 6,480
研究集会の開催	運営費	60,000	61,000		1,000
学会賞の授与	運営費	20,000	15,520		▲ 4,480
	選考委員会会議費	5,000	0		▲ 5,000
	記念品代	20,000	0		▲ 20,000
ホームページの運営	運営費	80,000	97,255		17,255
研究プロジェクトの推進	運営費	100,000	25,000		▲ 75,000
総務費	理事会会議費	100,000	100,073	*5	73
	事務費	180,000	138,383	*6	▲ 41,617
	日本スポーツ体育健康科学学術連合年会費	10,000	10,000		0
	人件費	125,000	125,000		0
予備費		2,058,874	0		▲ 2,058,874
支出合計（B）		3,578,874	1,308,064		▲ 2,270,810

*1　¥120増（郵送代）
*2　¥4,125減（見込み計上が確定したため：第27巻印刷費及び抜き刷り印刷費）
*3　¥2,095増（見込み計上が確定したため）
*4　¥1,305増（見込み計上が確定したため）
*5　¥3,600減（見込み計上が確定したため：理事会飲食代）
*6　¥492減（見込み計上が確定したため：封筒代、郵送代）

単位：円

収入合計（A）		支出合計（B）		収支（A）－（B）
3,773,992 円	－	1,308,064 円	＝	2,465,928 円
今期収入合計		今期支出		今期収支
1,231,658 円	－	1,308,064 円	＝	−76,406 円

特別会計

【収　入】　　3月31日 現在

項　目	平成25年度予算	平成25年度決算	増減（▲減）
普通預金元本	872,321	872,321	0
普通預金利息	100	122	22
合計	872,421	872,443	22

【支　出】　　（円）

項　目	平成25年度予算	平成25年度決算	増減（▲減）
本部会計繰入	20,000	0	▲ 20,000
合計	20,000	0	▲ 20,000

単位：円

872,443 円	－	0 円	＝	872,443

【別表２】

平成26年度　収支予算（平成26年3月31日現在）

一般会計

【収　入】

項　目			平成25年度予算	平成26年度予算		増減（▲減）
前年度繰越金			2,478,874	2,465,928		▲ 12,946
会費	会員	会計年度以前	100,000	100,000	*1	0
		会計年度	710,000	710,000	*2	0
	賛助会員		100,000	160,000	*3	60,000
入会金			20,000	20,000	*4	0
事業収入			150,000	150,000	*5	0
特別会計繰入金			20,000	20,000		0
収入合計（A）			3,642,334	3,625,928		▲ 16,406

*1　20人@¥5,000−　　*2　正会員130人@¥5,000−　学生会員20名@¥3,000−　　単位：円

*3　2社@¥40,000−　4社@¥20,000−

*4　20人@¥1,000−

*5　研究集会等残金，総合型テキスト印税，研究誌頒布代金

【支　出】

項　目		平成25年度予算	平成26年度予算		増減（▲減）
体育･ｽﾎﾟｰﾂ経営学研究の発行	通信費	5,000	2,000	*1	▲ 3,000
	編集会議費	70,000	50,000	*1	▲ 20,000
	編集諸費	25,000	25,000		0
	印刷費	400,000	400,000		0
	発送費	20,000	20,000		0
	人件費	90,000	60,000	*1	▲ 30,000
学会大会運営	運営補助費	150,000	150,000		0
	優秀発表賞経費	20,000	20,000		0
会報の発行	印刷費	30,000	30,000		0
	発送費	10,000	8,000	*1	▲ 2,000
研究集会の開催	運営費	60,000	60,000		0
学会賞の授与	運営費	20,000	16,000	*1	▲ 4,000
	選考委員会会議費	5,000	5,000		0
	記念品代	20,000	20,000		0
ホームページの運営	運営費	80,000	100,000	*2	20,000
研究プロジェクトの推進	運営費	100,000	100,000		0
総務費	理事会会議費	100,000	100,000		0
	事務費	180,000	120,000	*1	▲ 60,000
	日本スポーツ体育健康科学学術連合年会費	10,000	10,000		0
	人件費	125,000	125,000	*3	0
予備費		2,058,874	2,204,928		146,054
支出合計（B）		3,578,874	3,625,928		47,054

*1　平成25年度実績を鑑み，予算額減　　単位：円

*2　ホームページ運営人件費、ドメイン取得料・レンタルサーバ代

*3　発送人件費および事務局人件費

収入		支出		収支
3,625,928 円	−	3,625,928 円	＝	0 円
当期のみ（ 1,160,000 ）		（ 1,421,000 ）		（ −261,000 ）

特別会計

【収　入】

	平成26年度予算
普通預金元本	872,443
利息合計	122
合計	872,565

単位：円

【支　出】

	平成26年度予算	
本部会計繰入	20,000	
合計	20,000	*1

*1　普通預金より（学会賞記念品代として）　　単位：円

＜参考＞平成25年度特別会計決算

【収　入】

項　目	平成25年度決算
定額貯金元本	0
普通預金	872,321
普通預金利息	122
合計	872,443

単位：円

【支　出】

項　目	平成25年度決算
本部会計繰入	0
合計	0

単位：円

収入		支出		
872,565 円	−	20,000 円	＝	852,565 円

理事を実行委員長とし、地域スポーツ関連については作野理事が実行委員長を務めることとなった。

②研究推進委員会

研究推進委員会の斎藤委員長から次年度事業計画の提案がなされた。研究プロジェクトについては、平成 25 年度の第 45 回研究集会で提案された３つの研究プロジェクト（①見るスポーツ、②エクセレントクラブの経営評価指標の作成、③体育・スポーツ経営研究の方法論をめぐる課題）の組織化や予算獲得を目指した活動を推進していくことが提案された。③のテーマがプロジェクトとして成立しにくい性格であることから、次年度は①②の二つの研究プロジェクトを推進していくこととなった。併せて、次年度事業として学会シンポジウムや研究集会を開催することが確認され、テーマについては、上記２つに運動部活動・体罰問題を含めた３つのテーマの中から検討していくこととなった。併せて、今年度の総会において、研究プロジェクトの立ち上げから運営までの流れを提案することが確認された。

③第 38 回学会大会について

第 38 回学会大会（白鴎大学）実行委員長の藤井理事から学会大会の日程について説明がなされ、平成 27 年 3 月 19 日（木）～21 日（土）で開催を予定していることが確認された。

平成 25 年度　第 4 回常務理事会

期日：2014 年 3 月 3 日（月）18：00～20：00

会場：筑波大学東京キャンパス文京校舎 431 教室

出席：柳沢、木村、清水、川邊、小山、斎藤、作野、藤井、松岡、間野、朝倉（幹事）、今宿（幹事）

欠席：木村、作野、間野

審議事項

1. 平成 25 年度総会議案について

(1) 平成 25 年度活動報告

清水理事長から平成 25 年度の活動報告が行われた。まず、『体育・スポーツ経営学研究第 27 巻』が印刷中であり、発行され次第、会員に送付することが確認された。次に、会報 68 号が３月中に発行されることを確認した。次に、学会賞・奨励賞の授与について１月に会員に推薦依頼文書を送付したが、推薦がなかったことが確認された。なお、『体育・スポーツ経営学研究第 27 巻』に掲載される論文については、平成 26 年度の対象とすることを確認した。

(2) 平成 25 年度収支決算報告

清水理事長から平成 25 年度収支決算報告がおこなわれた。併せてここ数年、当期の収支が 20 万から 30 万円であることから対応を検討する必要性を確認した。

(3) 平成 26 年度事業計画（案）

平成 26 年度事業計画について、特に第 38 回大会、研究集会事業、研究プロジェクトの推進について審議が行われた。

①第 38 回大会について

第 38 回大会を白鴎大学で開催することを確認した。併せて、研究推進委員会委員長の斉藤理事から第 38 回大会において理事会企画シンポジウムを開催することが提案され、承認された。内容及びメインテーマについては、学会として取り組んでいく研究テーマを設定することを踏まえて検討し、今年度の総会で提案することとなった。併せて、第 39 回大会の開催校については現在のところ未定であることを確認した。

②研究集会事業について

平成 26 年度の研究集会事業として、実践対応委員会が３つの研究集会を企画していることを確認した。まず、学校体育関連（７月～12 月／「これからの子どものスポーツ環境を考える（仮）」）をテーマとした研究集会を九州地区で開催することを検討中していることを確認した。次に、スポーツ政策関連（９月中旬から下旬／「オリンピック・パラリンピックによるスポーツ人口の拡大（仮）／実行委員長：間野理事」）をテーマとした研究集会を日本体育・スポーツ政策学会との共催で開催することを確認した。次に、地域

スポーツ関連（12 月～１月／「総合型地域スポーツクラブ経営の本質を問うⅤ（仮）／実行委員長：作野理事」）の研究集会を開催予定であることを確認した。なお、日本体育・スポーツ政策学会との共催による研究集会については、実行委員会に日本体育・スポーツ政策学会の理事に加わっていただくことを確認した。

③研究プロジェクトの推進

研究推進委員会委員長の斎藤理事から２つの研究プロジェクトを推進していくことが提案された。それぞれのプロジェクトの名称およびプロジェクトについては、「スポーツプロデュース研究プロジェクト」（プロジェクトリーダー：斎藤理事）、

「エクセレントクラブ研究プロジェクト」（プロジェクトリーダー：作野理事）とすることを確認した。

(4)収支予算計画

平成 26 年度の収支予算計画について清水理事長から説明が行われ、概ね今年度と同様であることを確認した。

2．学会年度会費について

①年度会費の値上げについて

清水理事長から、ここ数年の収支決算がおよそ 20 万円から 30 万円であることを鑑み、年度会費の値上げが提案され、承認された。併せて、会員に対しては学会の財政状況を踏まえて年度会費の値上げを検討していることを周知した上で、来年度の総会において提案することとなった。

②年度会費未納者（２か年以上）への対応

年度会費の滞納者への対応について意見交換が行われた。その結果、会則第９条「会員で２か年会費を納入しない者は退会したものとみなす」を踏まえ、本年度末までは督促を継続し、来年度以降、未納者に対する退会の手続き等を進めることを確認した。具体的に、現時点で滞納年数が 5 ヶ年以上の会員には、本年度発行の『体育・スポーツ経営学研究第 27 巻』を送付せず、会員継続の意思確認を行うこととなった。また滞納年数が 4 カ年の会員に対しては、機関誌を送付した上で、次年度からサービスを停止すると共に会員継続の意思確認を書面にて行うこととなった。なお、会員継続の意思を示した場合は、納入していない会費の納入を求めることとなった。

平成 25 年度　第 2 回理事会

期日：2013 年 3 月 20 日（土）11：00～12：00

会場：新潟総合学園学生総合プラザ STEP

出席：柳沢、木村、中路、清水、天野、市野、川邊、小山、斎藤、作野、浪越、藤井、藤田、竹下、長積、西原、永田、朝倉（幹事）、今宿（幹事）

欠席：阿保、川崎、武隈、野崎、原田、松永、間野

1．報告事項

平成 25 年度総会資料（案）に基づいて、報告が行われた。

(1)平成 25 年度活動報告

清水理事長から平成 25 年度活動報告が行われた。

(2)経営学研究投稿の手引き

中西編集委員長から機関誌『体育・スポーツ経営学研究』の投稿の手引きに関して、ＷＥＢサイト（ホームページ）の引用・参考文献の記述方法に関する条項を追記することが報告された。また、藤田理事から投稿資格について質問があり、原則として会員に限ることを確認した。

(3)学会賞、奨励賞の授与について

学会賞及び奨励賞の推薦がなく、今年度は該当なしとすることを確認した。

(4)平成 25 年度収支報告については、

清水理事長から、平成 25 年度収支決算報告が行われ、収入合計 3,634,564 円（今期 1,092,230 円）、支出合計 1,312,761 円、収支 2,321,803 円（今期収支-220,531）であったことが報告された。併せて、会費収入の少なさへの対応を中心とした赤字体質改善の必要性を確認し、会費の値上げについて検討していることが報告された。

2. 審議事項

(1)平成 26 年度事業計画

平成 26 年度事業として、体育・スポーツ経営学研究第 28 巻の発行、会報 65 号、66 号の発行、第 38 回大会を白鴎大学で開催することを確認した。なお、第 38 回大会内で理事会企画シンポジウムを開催することを確認した。併せて、第 39 回大会については、会場校は未定であることを確認した。また、研究集会の開催について、第 48 回研究集会を早稲田大学早稲田キャンパスで 9 月に、第 49 回研究集会を鹿児島市内で 12 月に、第 50 回研究集会を 1 月に筑波大学東京キャンパスで開催する予定であることを確認した。これに加えて、天野理事から東北地方で「震災復興と総合型地域スポーツクラブの未来」をテーマとした研究集会を開催することが提案された。なお、開催時期については、今後検討していくこととなった。次に、研究プロジェクトの推進として「スポーツプロデュース研究プロジェクト」を斎藤理事、「エクセレントクラブ研究プロジェクト」を作野理事が中心になって推進していくことを確認した。藤田理事から「エクセレントクラブ」という名称について、特に総合型地域スポーツクラブを対象とした研究であることがわかるようにできないか質問がなされた。これについては、今後必要であれば名称の変更を行うと共に、特に説明が必要なときは、総合型の研究とわかるようにすることを確認した。その他、学会賞・奨励賞の授与、学会広報活動を行っていくことを確認した。

(2)平成 26 年度収支予算計画

清水理事長から平成 26 年度収支予算計画について説明が行われた。これまでの収支決算の実績を踏まえて支出の適正化をはかり、平成 25 年度収支予算計画と比較して 97,071 円を減額したことを確認した。藤田理事から体育・スポーツ経営学研究の査読審査員への謝礼について質問が行われた。これについては、外部の審査委員や依頼論文の著者については謝礼を支払うが、会員については謝礼を支払わないことを確認し、財政状況を鑑みて今後検討していくこととなった。

(3)規程改正について

「名誉会員規程」の制定と推薦について清水理事長から説明が行われた。規定を制定したうえで５名を推薦し、了承を得たことが報告された。また、名誉会員については、会報や学会誌で氏名を公開することが確認された。次に、「理事の選出方法に関する内規」の改正について説明が行われ、女性役員の比率向上を目指し内規を改正することを確認した。選挙の運営に関する詳細については、次年度、選挙管理委員会で検討することとなった。

平成 26 年度　第 1 回常務理事会

期日：2014 年 5 月 23 日（金）18：00～20：00

会場：早稲田大学高田牧舎 2F 会議室

出席：柳沢、清水、川邊、小山、作野、藤井、松岡、朝倉（幹事）、今宿（幹事）

欠席：木村、齊藤、間野、浪越

1. 報告事項

(1)第 37 回大会決算報告

清水理事長から西原理事が作成した資料をもとに第 37 回大会の決算報告がおこなわれ、収支が 31,428 円であったことが確認された。

(2)平成 25 年度決算報告

事務局から平成 25 年決算報告が行われた。3 月末日締めで、総会時（2014 年 3 月 20 日開催）の決算報告から変更があった点が説明され、今期の収支が－76,406 円であったことが確認された。

2. 審議事項

(1)平成 26 年度理事会組織の分担

清水理事長から平成 26 年度の理事会組織における役割分担について説明が行われた。前年度からの大きな変更点として国際交流委員会を解消し、国際交流関係の事業については必要があった場合に研究推進委員会の事業として進めること

が確認された。

(2)平成 26 年度事業計画について

1)会報の発行について

広報委員会委員長の藤井理事から、資料をもとに会報 65 号（7 月発行予定）、66 号（平成 27 年 1 月発行予定）の企画およびホームページ運営に関する改善事項が説明された。説明を受け、以下５つの提案があり、承認された。①66 号については第 51 回研究集会（平成 27 年 1 月開催予定）の報告を掲載することを踏まえ 2 月初旬に発行する。②65 号の企画として、逝去された梅澤元副会長の記事を掲載する。③各委員会報告については、全委員会ではなく必要な委員会のみとする。④研究プロジェクトの記事を設ける。⑤平成 25 年度総会で推薦された名誉会員の記事についても、毎号１～２名ずつ名誉会員に寄稿を依頼する。

2)第 38 回学会大会について

第 38 回大会実行委員長の藤井理事から大会準備状況が説明され、理事会企画シンポジウムをはじめ大会内のプログラム概要を作成することが確認された。シンポジウム等の企画数と研究発表数のバランスを考えて、プログラムのアウトラインを次回理事会で提案することを確認した。

3)研究集会事業について

①第 48 回研究集会「オリンピック・パラリンピックによるスポーツ人口の拡大（仮）」

間野理事が作成した第 48 回研究集会案をもとに審議が行われた。日時は 2014 年 9 月 27 日(土)、会場は早稲田大学小野記念講堂で開催することとなった。プログラムについては、外部から５名を招き、基調講演とパネルディスカッションを行う予定であることを確認した。

②第 49 回研究集会「震災復興とスポーツの力」

天野理事が作成した第 49 回研究集会案をもとに審議が行われた。日時は、2014 年 9 月 27 日(土)とし、プログラムについては基調講演１名、講演１名、パネルディスカッションをパネリスト４名で行う予定であることを確認した。

※上記二つの研究集会日程が重なっていることから、同日開催するか否かについて審議が行われた。東北地区では地域スポーツクラブの連絡協議会との同日開催を予定しており、第 48 回研究集会については会場確保の都合上、日程を変更することが困難なため、第 48 回研究集会を別日程で開催可能な会場を確保することとし、無理であれば同日開催することとなった。

③第 50 回研究集会（九州地区開催）「これからの子どものスポーツ環境を考える（仮）」

九州地区開催の第 50 回研究集会について、開催期日が 12 月 6 日もしくは 7 日、会場については鹿児島大学もしくは県民交流センターを予定していることを確認した。なお、詳細については次回常務理事会で再提案することとなった。

④第 51 回研究集会「総合型地域スポーツクラブ経営の本質を問うⅤ（仮）」

開催期日を 1 月 24 日（土）に予定していることを承認した。

4)研究プロジェクトの推進（研究推進委員会）

平成 25 年度総会で研究プロジェクトの推進が承認されたことを受け、出来るだけ早く研究の方向性と趣旨を含めた研究計画を立案すると共に、プロジェクトメンバーの公募を行うこととなった。作野理事から２つのプロジェクトの期間を設定することが提案され、３年を目途とし、期間については研究計画を踏まえ柔軟に設定することとなった。また、研究概要の作成とメンバーの公募を６月中に行い、その後８月から９月に研究会を開いた後、秋の科研費申請に間に合うようにプロジェクトを進めることとなった。なお、研究概要については HP に掲載することとし、作野理事、齊藤理事に原稿を依頼することとなった。

5)会則改正（総務委員会）

会費の値上げを進めるにあたり、会費未納で前年度末でサービスを停止している会員の退会手続きを進めることとなった。

6)その他

①体育・スポーツ経営学研究第 28 巻の発行（10 月発行予定）

現在特集論文のテーマを検討しており、投稿論文 1 本、研究集会報告の編集を進めている。

②第 39 回大会について

東海地区の市野理事、近畿地区の長積理事に打診し、開催の可否を検討していることが報告された。

③地域スポーツクラブ関連の出版事業

次回常務理事会に目次、執筆者、出版社の原案を提案することが報告された。

④ホームページのリニューアル

学会のロゴを変更することが提案され、継続審議となった。なお、HP の改善（主にコンテンツ）については広報委員会で原案を提示することとなった。併せて、学会ロゴの変更を進めることが承認された。また、リニューアルのプロセスを提案することが確認された。

⑤選挙規定および細則の整備

総務委員会で選挙の進め方および規定（細則）の整備を進めることが承認された。

平成 26 年度　第 2 回常務理事会

期日：2014 年 6 月 27 日（金）18：00～20：00

会場：筑波大学東京キャンパス 435 教室

出席：柳沢、木村、清水、川邊、小山、作野、齊藤、藤井、松岡、朝倉（幹事）、今宿（幹事）

欠席：間野、浪越

1．報告事項

(1)第 39 回大会会場校について

清水理事長から第 39 回大会の会場校については、近畿地方の長積理事を中心として京都駅前に会場を確保し、開催することとなったことが報告された。

(2)会報 65 号の進捗状況

広報委員会委員長の藤井理事から、会報 65 号の企画案について報告が行われた。なお、梅澤名誉会員の追悼寄稿については、大内会員と木村副会長に依頼することとなった。

2．審議事項

(1)平成 26 年度事業計画について

1)第 38 回学会大会について

藤井理事から白鴎大学で開催を予定している第 38 回大会の開催要項（案）について説明が行われた。学会創立 30 周年を踏まえ、プログラムに記念講演を組み込むと共に、主なプログラムとして研究発表、公開基調講演、公開パネルディスカッション、理事会企画シンポジウムを行う予定であることが説明された。また、学会大会のテーマを「体育・スポーツ経営学原点回帰：人とスポーツの関わりを問い直す」とすることが提案された。なお、理事会企画シンポジウムについては、研究促進委員会委員長の齊藤理事を中心に準備を進めていくことが確認された。意見交換の結果、次回理事会に具体的な企画案を提案することとなった。

2)研究集会について

前回理事会で開催予定日が重なっていたため開催日の変更を進めていた第 48 回研究集会については、会場確保、日程調整の都合上、来年度に開催することとなった。※開催回数は繰り上げ

①第 48 回研究集会「震災復興とスポーツの力」

2014 年 9 月 27 日（土）に東北地区で開催を予定している第 48 回研究集会については、予定通り開催することを確認した。

②第 49 回「これからの子どものスポーツ環境を考える」（仮）

2014 年 12 月 6 日（土）もしくは 7 日（日）に九州地区で開催を予定している第 49 回研究集会については、九州地方で開催準備中であることが報告された。

③第 50 回「総合型地域スポーツクラブ経営の本質を問うⅤ」（仮）

2015 年 1 月 24 日（土）に開催を予定している第 50 回研究集会については、作野理事がダイバ

シティマネジメントを主なテーマとする講演依頼を進めていくことが確認された。

3)研究プロジェクトの推進について

6月中に研究プロジェクトの公開とメンバーの公募を進めるために、齊藤理事、作野理事から各プロジェクトの計画案について説明が行われた

①スポーツプロデュース研究プロジェクト（プロジェクトリーダー：齊藤理事）

齊藤理事から「スポーツプロデュースに関する研究」をテーマとするプロジェクト研究（募集）計画について説明が行われ、主旨、募集方法、プロジェクト組織、スケジュールが確認された。清水委員長からスポーツプロデュースという概念の定義を加えることが提案された。また、柳沢副会長から3年間のプロジェクトにおける研究課題を構造化して整理することが提案された。

②エクセレントクラブ研究プロジェクト（プロジェクトリーダー：作野理事）

作野理事から同様に「エクセレントクラブ研究」をテーマとするプロジェクト研究（募集）計画が説明された。清水理事長から計画案に組み込まれている事例調査の目的を明確にすることが提案された。

4)出版事業について

清水委員長から総合型地域スポーツクラブ関係の出版事業計画と内容構成について説明が行われ、大修館書店に大まかな出版計画を打診した際の返答をもとに審議が行われた。まず、以前出版した『テキスト総合型地域スポーツクラブ増補版』の処遇に関わって今回の出版書籍の発行時期について審議が行われ『テキスト総合型地域スポーツクラブ増補版』については存続し、出来るだけ早い段階で今回の出版を目指すこととなった。また、制作については編集委員会方式とし、学会内の出版事業検討委員会を中心に編集者および出版社と交渉していくこととなった。なお、出版事業検討委員会委員長の清水理事長が中心となって出版に向けた活動を進めていくこととなった。

5)その他

広報委員会の小山理事から学会ロゴの変更について提案された。まず、学会のカラーを定めるかについて審議が行われ、基本的にはカラーは定めずにデザインを進めることとなった。また、デザインの方法については業者に依頼するなどして複数案を提案してもらい、提案されたデザインの中から会員に評価・選定してもらうこととなった。なお、具体的な変更プロセスについては、次回理事会で提案することとなった。

(2)選挙管理規則の改正について

総務委員会の川邊理事から理事選挙要綱の改定案について説明が行われた。主な変更点として、7名連記の記名が7名に満たない場合も有効とすること、自地方区の会員の記入がない場合は無効とすること、女性投票（記名）枠を設け女性の会員の記入がなされていないものを無効とすることが提案された。この件については、特にどのようなケースを無効票とするかについて次回理事会で審議することとなった。

■ 事務局から

◆ 新入会員の紹介(敬称略:平成 26 年 9 月 8 日現在)

お名前	ご所属
常浦　光希	岡山県高梁市立宇治高等学校
西村　貴之	金沢大学
木戸　直美	上智大学短期大学部
佐藤　崇之	東北公益文科大学
角田　幸太郎	別府大学
川上　祐司	帝京大学
桃井　克将	徳島文理大学 保健福祉学部
山下　博武	徳島ヴォルティス
田中　邦宏	福島県企画調整部文化スポーツ局スポーツ課

◆ 「体育・スポーツ経営学研究」投稿論文の募集

「体育・スポーツ経営学研究」に掲載する論文を随時募集中です。学会発表の内容などをおまとめいただき、投稿をお願いいたします。投稿規定に関しては学会HPをご覧ください。

◆ 「体育・スポーツ経営学研究」バックナンバーの販売

学会誌「体育・スポーツ経営学研究」のバックナンバーの購入(第 1 巻～第 26 巻)を希望される方は事務局までご連絡ください。販売価格は 1 冊 2,000 円となります。また、第 1 巻～第 20 巻をまとめた CD(20,000 円)もご用意しております。

◆ ご住所・連絡先の変更について

ご異動等によるご住所・連絡先の変更は、FAX、Mail等にて、事務局までご一報ください。

◆ 年度会費納入のお願い

未納分の年度会費納入をお願いいたします。今年度(平成 25 年度)会費の納入は 2014 年 3 月 31 日までにお願いいたします。

◆ **ご住所・連絡先の変更について**

ご異動等によるご住所・連絡先の変更は、FAX、Mail等にて、事務局までご一報ください。

日本体育・スポーツ経営学会　会報 65 号
発行日：平成 26（2014）年 9 月 20 日（年 2 回発行）
発行者：日本体育・スポーツ経営学会　会長　柳沢　和雄
編集者：日本体育・スポーツ経営学会　広報委員会
事務局：〒305－8574　茨城県つくば市天王台１－１－１　筑波大学体育経営学研究室
日本体育・スポーツ経営学会事務局（担当：朝倉雅史）
E-mail：jimukyoku@jsmpes.jp　Tel/Fax: 029-853-6363